晩唐藩鎮転型の渦中における編纂活動

―― 自選集の視点からみた『桂苑筆耕集』

呉　　皓

唐代における「四六集」（儀礼的な表・状・箋・啓を主体とする別集）の淵源は(1)、令狐楚（766～837）の『表奏集』に求められるが、現存するものはごく一部である。その中で、ほぼ本来の姿を保ったまま伝わる貴重な文献としては、入唐新羅人・崔致遠（857～？）の『桂苑筆耕集』を挙げることができる。『桂苑筆耕集』は、崔致遠が高駢（821～887）の淮南節度使幕府在任中に、高駢の代筆として作成した表状箋啓などの四六文を中心に構成された別集である。『桂苑筆耕集』は高駢の淮南幕府の状況を反映している資料を多く収録しているため、多くの先行研究が『桂苑筆耕集』に記された史実をもって、正史の闕遺を補おうとしてきた(2)。また、『桂苑筆耕集』の文書学的価値に着目した研究も行われている(3)。さらに、崔致遠が朝鮮文化史および中朝交流史において重要な位置を占めていることから、『桂苑筆耕集』を通じて作者の生涯や思想を描き出そうとする研究も存在する。当然ながら、同書の文学的価値も研究者の関心を集めている(4)。しかし、『桂苑筆耕集』の性格そのものに焦点が当てられた研究は、今に至るまでほとんどなされていない。本稿では、こうした『桂苑筆耕集』という「四六集」を、政争の渦中に編纂された「自選集」という視点から再検討することを目的とする。

「自選集」とは、作者自身が自分の作品を選んで編纂した文集である。「唐人選唐詩」や「唐人選唐文」に関する研究が発達している現在、唐人による「自選集」の研究は依然として停滞している。この背景には、原態を保ったまま今日まで伝わる唐代の自選集が極めて稀であるという客観的要因がある。一方で、唐人が自身の文章の編選に極めて慎重であったことは、史料からも窺える(5)。本稿では『桂苑筆耕集』を例として、作者による自選集の編纂がいかに外部の政治環境から直接的な影響を受けたのかを考察したい。

一、『桂苑筆耕集』の選文基準

崔致遠が編纂した『桂苑筆耕集』は自選集であり、著者自身が「桂苑筆耕序」においてその由来を以下のように明確に説明している。

及罷微秩、従職淮南。蒙高侍中専委筆硯。軍書輻至、竭力抵当。四年用心、万有余首。然

淘之汰之、十無一二。敢比披沙見宝、粗勝毀瓦畫墁。遂勒成『桂苑集』二十巻。(6)

微禄の官を辞したのち、淮南に赴任した。高駢侍中の信任を受けて、文書作成の職を任されることとなった。軍務に関する書簡が次々と届くなか、全力を尽くしてこれに対応した。四年間に心を込めて書いた文章は一万篇を超えた。しかし、それらを選び抜いた結果、十分の一、二にも満たなかった。砂中に宝を探し出すほどのものではないにせよ、屋根瓦を破壊し、田畑の境界線を画定した後に、これを抹消するような無益のことよりは、いくばくかの価値はあると自負する。こうして『桂苑集』二十巻を編纂した。

つまり、崔致遠が広明元年（880）末から中和四年（884）十月にかけ、高駢の淮南幕府において公文書代作に従事した約四年間に執筆した文章は一万篇を超えたものの、最終的に選編されたのは約三百篇に過ぎなかった。そのことから、厳密な選別が行われたことがわかる。序文の記述が示す通り、『桂苑筆耕集』は新羅国王への献上した作品集であるため、その編纂目的はまず文集を通じて文学的才能を示し、国王からの評価を得ることであった。「敢比披沙見宝、粗勝毀瓦畫墁（砂中に宝を探し出すほどのものではないにせよ、屋根瓦を破壊し、田畑の境界線を画定した後に、これを抹消するような無益のことよりは、いくばくかの価値はあると自負する）」という表現からも、選文の基準があたかも純粋に文学的価値に基づいていたかのように見受けられる。しかし筆者の考察によれば、崔致遠の選文には単なる文学的基準を超えた、深い政治的配慮や個人的感情が働いていた可能性がある。具体的には、彼は『桂苑筆耕集』を通じて、かつて自らに知遇の恩を与えた幕主・高駢の肯定的な政治的イメージを構築しようと意図していたのではないか。

実際、高駢の代筆として作成された表状箋啓などが主に収録されている『桂苑筆耕集』には、発信者である高駢自身の負のイメージが前面に出ることは考えにくい。しかし本集の特異性は、崔致遠が高駢をめぐって生じた非難に反駁する意図のもと、作品を選択している点にある。具体的に言えば、正史に残されている高駢に対する数々の否定的評価は、当時の人々が彼に向けた非難をそのまま反映していると考えられる(7)。そして、後述するように、『桂苑筆耕集』の収録作品を詳細に検討すると、崔致遠は自身の選文を通じて、これらの特定の非難に対し意図的かつ的確に反駁を試みていることが明らかとなる。このようなテクスト間における非難と反駁との応酬は、ほぼ一対一で対応し得るものであり、それによって崔致遠の『桂苑筆耕集』編纂が強い政治的意図を帯びていたことが立証されるのである。一方で、崔致遠が高駢のために作成した大量の儀礼文書には、高駢の政治的イメージとは無関係な、いわば「中立的」な文章が多数含まれていたと推測される。例えば、冬至や元旦に皇帝へ奉る慶賀の表章や、宰相以外の広範な朝廷官員あるいは自分の幕僚に宛てた儀礼的書簡などである。しかし、この種の文書は他の四六集では一般的に収録されるにもかかわらず、『桂苑筆耕集』ではほぼ完全に排除されている。すなわち、同書の選文においては「中立的」な文章が意図的に省かれ、採録文の大部分が明確な政治性を帯びており、その目的は当時広まっていた高駢への各種批判に体系的に反論する点にあったと理解される。この視点は従来の研究ではほとんど触れられておらず、本稿ではそれを立証することを目的とする。以

下では、正史に記載されている高駢をめぐる具体的な非難と『桂苑筆耕集』の選文を取り上げ、詳細に分析を進める。

『桂苑筆耕集』は全二十巻で、巻一から巻十二までは崔致遠が高駢の代筆として作成した各種の公私文書、巻十三・十四は幕府辟召の挙牒、巻十五・十六は高駢に代わって執筆された斎詞・祭文・記・疏、そして巻十七から巻二十までは崔致遠の私的な書簡であり、その多くは高駢に宛てたものである。巻一から巻十二は『桂苑筆耕集』の核心部分を成しており、先行研究においても最も注目されてきた[8]。ただし、前十一巻には上行文書（下から上へ出される文書）または平行文書（同格の者どうしがやり取りする文書）が収録され、第十二巻は下行文書（上から下へ下される文書）である。前者が対外的関係における高駢像を反映し、後者は内部的関係における高駢像を示している。こうした性質の相異により、本章ではまず前十一巻における編纂方針について論じることとする。第十二巻については第三章で論じる。

（一）兵を動かさずに敵を放任した事

高駢は広明元年九月から中和四年六月に黄巣が討たれるまで、一兵たりとも動かさなかった。その理由について、正史と『桂苑筆耕集』が伝える事情が食い違うことは、すでに先行研究に指摘されている[9]。これらの先行研究は『桂苑筆耕集』を根拠に正史記述の弁証を試みてきたが、注目すべきは、正史における高駢への非難が、正史の編纂当時に初めて現れたものではない点である。『資治通鑑考異』引『驚聴録』に、「表至、中書咸有異議、遂京国士庶浮謗日興、云淮南与巣衷私通連、自固城池、放賊過淮也。[10]（高駢の上奏が至ると、中書省では皆が異議を唱え、都の士人と庶民も次々に誹謗を始め、高駢が黄巣と内通し、自ら城を固守して賊の淮河を渡ることを放任したのだと噂されるようになった）」とある。この記載から、当時、朝廷内で高駢に対する非難が既に存在していたことが分かる。このような状況下で崔致遠が高駢に不利な世論を反論するため、『桂苑筆耕集』に文章をのせた論理を纏めると、以下の三つの要素に集約される。

（1）高駢は中和元年の春夏および中和二年五月に、二度にわたり出兵して黄巣を征討しようとしたのであり、伝聞にあるように勤王の意思がなかったわけではない。

（2）中和元年に結局撤兵した原因は、進軍停止の詔勅が下ったこと、ならびに徐州の時溥・浙西の周宝・宣州の景虔貞が侵攻してきたためである。

（3）中和二年の出兵が再び実現しなかった原因は、徐州の時溥が物資輸送を遮断し、泗州に侵攻したことによる。

そのような弁解を成立させているのは、まさに『桂苑筆耕集』における選文である。具体的な関連選文は表１の通りである。

表１に示された各篇はすべて儀礼的な文書であるが、いずれも高駢の軍事行動の詳細をのべ、高駢の為に弁護の論理を構築しようとする意図が明瞭である。例えば、巻十一「答襄陽郤将軍書」の「細察徐州所為、是作黄巣外応。不然則何以毎見当軍臨発、却将凶党奔沖。（細かに察するに、徐州の行為は黄巣の外援と見なすべきものである。そうでなければ、なぜ私の軍隊が出発しよう

表 1、高駢の黄巣鎮圧関連篇目表

篇名	内容	創作時間
巻三·謝詔状	中和元年の出兵企図	中和元年四月十日
巻三·謝宣慰状		中和二年二月二十六
巻十一·招趙璋書		中和元年
巻十一·檄黄巣書		中和元年七月八日
巻八·幽州李可挙大王四首·第三	中和二年の出兵企図	中和二年
巻九·都統王令公三首·第一		中和二年
巻九·都統王令公三首·第二		中和二年
巻十一·告報諸道征会軍兵書		中和二年五月十二日
巻三·謝詔示徐州事宜状	進軍停止の詔勅と隣道からの侵攻により出兵が不可能となった事情	中和三年二月二十五日
巻七·泗州鄭庾常侍		中和三年
巻八·泗州于濤常侍		中和三年
巻八·徐州時溥司空三首·第一		中和三年
巻九·泗州于濤尚書二首		中和二年
巻九·都統王令公三首·第三		中和二年
巻十·前泗州鄭廉常侍		中和三年か四年
巻十一·答徐州時溥書		中和二年六月十六日
巻十一·告報諸道征促綱運書		中和二年
巻十一·答襄陽郤将軍書		中和二年七月四日
巻九·宣歙裴虔余尚書三首·第三		中和元年？
巻九·浙西周宝司空五首·第三		中和元年春
巻九·護軍郤公甫将軍三首·第一		中和三年
巻十一·答浙西周司空書		中和元年
巻十一·答江西王尚書書		中和元年十二月六日
巻十一·浙西周宝司空書		中和元年
巻十一·浙西護軍焦将軍書		中和元年

とするたびに、かえって賊軍を引き連れて侵攻してくるのか)」という記述では、出兵できなかった責任を徐州の時溥の侵攻へ全面的に転嫁している。同巻「答江西王尚書書」には、撤兵は「雖云帝命斯遵、実乃隣兵所阻（皇帝の命令を遵奉していたとはいえ、実際には周辺の軍勢の妨げがあったためである)」と述べられており、こうした主張は『桂苑筆耕集』において繰り返し強調されている。

(二) 解職の事

高駢は中和年間に二度の解職を経験した。初回は中和二年正月の都統職解任、第二回は同年十一月の塩鉄転運使罷免である[11]。正史はこの両事件に対する高駢の激烈な反応を伝える。例えば、『旧唐書』高駢伝には「駢既失兵柄、又落利権、攘袂大詬、累上章論列、語詞不遜（高駢は都統の

職を失い、さらに塩鉄転運使の職を失ったため、袖をまくって罵声をあげ、幾度も奏章を上げて争論し、その言葉遣いは不遜であった)」と明記されている。とりわけ、都統解任時の高駢の上奏文は全文が『旧唐書』高駢伝に収録されており、そこでは朝廷の重臣および僖宗皇帝に対する直接的な批判が露骨に述べられている。

しかし、『桂苑筆耕集』に描かれる高駢像は、これとは全く対照的である。関連する文書は、表２に示す通りである。

表２、高駢の解職関連篇目表

事件	篇名	創作時間
都統解任	巻二·謝賜御制真賛表	中和二年二月二十六日
	巻二·謝御箚衣襟並国信表	中和二年二月二十六日
	巻七·滑州都統王令公三首·第一	中和二年正月の後
塩鉄解任	巻二·謝就加侍中表	中和三年初
	巻二·謝賜宣慰兼加侍中実封表	中和三年六月十六日
	巻三·謝就加侍中兼実封状	中和二年末
	巻六·謝加侍中兼実封状	中和二年末
	巻六·謝落諸道塩鉄使加侍中兼実封状	中和三年初
	巻七·塩鉄李都相公二首·第一	中和二、三年の間
	巻七·塩鉄李都相公二首·第二	中和二、三年の間
	巻八·滑州王令公	中和二、三年の間
	巻八·塩鉄李都相公二首·第一	中和二、三年の間
	巻八·史館蕭遘相公	中和二、三年の間
	巻八·三相公	中和二、三年の間
	巻八·翰林侯翺学士	中和二、三年の間
都統か塩鉄解任	巻八·竜州裴峴尚書	未詳

表２に挙げた諸作品は、いずれも高駢の罷免に関連して、唐僖宗に奉った表状や同僚に宛てた状啓である。これらの表・状・啓において、高駢は罷職に対して一切の不満を述べず、むしろ皇帝への謝意を示し、自らの職務不適任を恥じる姿勢を示すとともに、後任の王鐸・李都に対して祝意を表している。

例えば、巻八「三相公」には、「任重咽喉、功微毫髪。早提兵柄、不能静剗寇戎、久握利権、無以広資経費。雖進退毎従於帝命、而否臧実愧於軍謀。以茲責躬、無所逃罪（重任を担いながらも、その成果は微々たるものだ。早く兵権を握ったにもかかわらず、敵を鎮圧できず、長く財政権を保持しながら、経費を十分に賄うことができなかった。進退は常に皇帝の命令に従ってはいるが、その采配は軍略として実に恥ずかしい限りである。このことを反省すると、罪から逃れることはできない)」とある。類似の表現が他の文書にも繰り返し用いられており、これは高駢自身の弁明であると同時に、朝廷への服従と忠誠を表明する言辞ともみなされる。巻八「竜州裴峴尚書」においても、「且国歩猶艱、天心難測。忠直者韜声戢影、奸邪者鼓舌箝唇。彼既一時、此須三黜。唯

当竭節、豈足興言（国の情勢はいまだに厳しく、皇帝の心は測り難い。忠実で正直な者は声を潜め身をひそめ、奸邪の者は舌を振り唇を鼓して勢いを増している。彼らが一時の栄を得ている今、私は三度の罷免を甘んじて受けねばならない。ただひたすら節を尽くすのみであり、もはや言い訳を述べる余地はない）」と述べ、罷免に対する無念を吐露しつつも、なお唐朝廷への忠節を堅持する姿勢を明らかにしている。

これらの文書を収録した意図は、当時流布していた高駢が罷職に不満を抱いたとする風説を否定する点にあることは明らかである。

（三）淮南巡幸の請願・黄巣討伐後の心理状態・致仕の事

『新唐書』高駢伝には、以下のように記されている。

> 駢都統三年、無尺寸功、幸国顚沛、大料兵、陰図割拠。一旦失勢、威望頓尽、故肆為醜悖、脅邀天子、冀復故権。而呉人顧雲以文辞縁沢其奸、偃然無所忌畏。又請帝南幸江淮。会平賊、駢聞、縮気悵恨。部下多叛去、鬱鬱無聊、乃篤意求神仙、以軍事属用之。(12)
>
> 高駢は都統を務めた三年間、一寸の功績もなく、国難を契機として多数の兵を集め、密かに割拠を図った。しかし突如失脚し、威望は急に失墜したため、かってきままに醜態をさらし、天子を脅して旧権の回復を試みた。そして、呉人の顧雲は文辞をもってその奸計を助け、憚ることなく振る舞った。さらに皇帝に淮南への巡幸を請願した。黄巣の平定を聞くや、高駢は意気消沈し、悔恨の念に駆られた。多くの部下が離反して鬱々とした日々を送り、ついには神仙を崇拝して軍事権を呂用之に委ねた。

以上の記述において注目すべき点は二つある。第一は、高駢が皇帝の淮南巡幸を請願した真の意図は、皇帝を実質的に自らの掌握下に置き、その権威を借りて天下に号令しようとする点にあったということである。第二は、黄巣討伐の報を受けた高駢は、喜悦ではなく、かえって沮喪の情を示したということである。

その他、『桂苑筆耕集』に見える高駢の致仕については、正史に明確な記載はないが、同書の関連文書を検討する限り、これも黄巣討伐後の高駢の心理と深く結びついていたことが明らかになる。したがって、本稿ではこれについても併せて考察する。

上述の三つの話題について、『桂苑筆耕集』に収録されている関連文書を表３に示す。

表３、淮南巡幸の請願・黄巣討伐後の心理状態・致仕関連篇目表

事件	篇目	創作時間
淮南巡幸の請願	巻二·請巡幸江淮表	中和元年
	巻二·請巡幸第二表	中和三年
	巻十·鄂州崔紹大夫	中和三年
	巻十·蕭遘相公二首·第一	中和三年
黄巣討伐後の心理状態	巻一·賀殺戮黄巣徒伴表	中和三年六月
	巻一·賀收復京闕表	中和三年四月
	巻一·賀殺黄巣表	中和四年六月
	巻一·賀回駕日不許進歌楽表	光啓元年三月
	巻六·賀殺黄巣賊徒状	中和三年六月
	巻六·賀收復京城状	中和三年四月
	巻六·賀内宴仍給百官料銭状	光啓元年三月
致仕	巻二·讓官請致仕表	中和三年四月の後
	巻九·前左省衛増常侍	中和三年四月の後
	巻十·蕭遘相公二首·第二	中和三年四月の後
	巻十·田軍容	中和三年四月の後

以上の選文から推察されるのは、崔致遠が次の三点の趣旨を伝えようとしていたことである。

（1）高駢の僖宗に対する淮南巡幸の請願は、国家利益と君主への忠誠心に基づく、真摯な行為であったこと[13]。

（2）黄巣が討伐された後、高駢は不快感を抱くどころか、むしろ表章によって朝廷に慶賀の意を表していたこと[14]。

（3）高駢は、自らが黄巣の討伐において顕著な功績を挙げられなかったことを自覚しており、そのために自発的に引責辞任を望んでいたこと[15]。

これら一連の文書を収録することで、崔致遠は高駢に対する否定的な政治評価を払拭し、積極的にその忠誠心と謙抑性を際立たせようとした。

（四）貢納の問題

正史には、高駢が淮南の賦税を納めなかったことに関する記載がしばしば見られる。

①帝在蜀、淮南絶貢賦、譖言道浙西為宝剽阻。（『新唐書』周宝伝）

皇帝が蜀にあった時、淮南は貢賦を絶ち、浙西を通った時に周宝に剽掠されたと嘘をついた。

②駢自乾符以来、貢献不入天子、貲貨山積。（『新唐書』高駢伝）

高駢は乾符以来、貢賦と進献を天子に納めず、財貨は山の如く積まれた。

③駢臣節既虧、自是貢賦遂絶。(『資治通鑑』巻二五五)

高駢の臣下としての礼節が既に欠け、それ以降、貢賦は完全に絶たれた。

④江淮転運路絶、両河、江淮賦不上供、但歳時献奉而已。(『旧唐書』僖宗紀)

江淮の転運の道が絶え、両河、江淮の貢賦は上納されず、歳時の献奉のみが行われた。

ここでまず、「貢賦」と「進献(献奉)」とを明確に区別する必要がある。先行研究が指摘するように、「貢賦」は国家の財政制度に基づく義務的な上納であり、「進献(献奉)」は節度使が個人名義で皇帝に贈る自発的な献上品である[16]。上述した①・③・④の記述はいずれも、高駢が「貢賦」を納めなかったことのみに言及しており、とりわけ④では、高駢が「歳時の献奉」を行っていたことが明記されている。一方、②は高駢が貢賦と進献(貢献)をともに停止したとする記述である。いずれにせよ、崔致遠は『桂苑筆耕集』の選文を通じて、これらの批判に対する反論を意図していたと考えられる。

「貢賦」に関する弁解は巻八「塩鉄李都相公二首」第二と巻十一「告報諸道征促綱運書」である。巻十一の「告報諸道征促綱運書」は、塩鉄転運使であった高駢が諸道に綱運(物資輸送)を促した文書である。文中では、「既装運舩、将扣飛楫。言遵汴道、径指圃田。必値徐戎、来侵淮口。扼断河路、攻囲郡城。近者又擁凶徒、直沖近境。敢憑蝟結、欲恣鯨呑。当道既見阻艱、暫須停駐(既に船舶を整え、まもなく櫂を操って出立し、汴河の水路に従い、直ちに河南へ向かう予定であった。しかし、徐州方面の軍勢が淮口に侵攻し、河道を遮断して郡城を攻囲する事態に遭遇した。近時においても、彼らはまた凶徒を率いて辺境へと直撃し、ハリネズミの毛のごとく集結した軍勢により、鯨のごとく淮南を飲み込もうとしている。淮南では既にこのような困難を呈しているため、当面は停泊を余儀なくされる状況である)」と、貢賦を運び届けられなかった責任を全面的に徐州の時溥の妨害に帰し、自らは納賦を怠ろうとしたわけではないと主張している。また、巻八「塩鉄李都相公二首」第二は、高駢が塩鉄使を罷免された後、新任の塩鉄使に宛てて送った文書である。そこでは、「当道雖乏供須、但勤貢献(私の管轄地域は物資の供給こそ乏しいが、貢献には努めている)」と述べ、貢賦と進献の双方に努める意志を明確に示している。

更に、『桂苑筆耕集』には、高駢が進献を積極的に行っていたことを示す記録が残されている。それは巻三「謝詔奨飾進奉状」、巻五「進金銀器物状」「進漆器状」「進御衣段状」「進綾絹錦綺等状」である。とりわけ巻三の「謝詔奨飾進奉状」には、「但属敵滋隣境、寇阻道途、運綱而既闕先登、贄礼而僅侔錫貢(ただ敵が隣境に跋扈し、賊が道路を遮断した結果、物資の輸送は遅滞していますが、進献は大抵例年の貢賦に匹敵する程度です)」とあり、進献が貢賦の不足を補填する意図をもって行われたことが読み取れる。巻五に収められた進物状の記述からしても、その進献の規模は極めて大きく[17]、高駢が朝廷に対する誠意と忠誠を意識的に示そうとしたものである。

(五)朝臣・近隣の節度使との不和

上述した諸篇目に加えて、『桂苑筆耕集』には、内容の上から見て前述のどの類型にも明確に分

類し難い文書が少なからず散見される。その多くは、ごく一般的な賀状・謝状、あるいは贈答文書である。しかしながら、宛先人物の身分という観点から分析を加えると、その大部分が当時の高駢と確執があったと見なされていた人物群に属していることが明らかとなる。その具体的な様相については、以下で詳論する。

(1) 王鐸・鄭畋・鄭凝績

黄巣の乱の鎮圧を巡り、時の宰相たる王鐸・鄭畋と高駢は深刻な対立を引き起こした。黄巣の乱勃発後、最初に都統に任じられた王鐸は、戦敗で失脚し、高駢の党与である宰相・盧携の画策により、都統の地位を高駢に奪われた[18]。中和二年正月、朝廷は高駢の出陣怠慢を理由にその都統を罷免し、後任として王鐸を再び任命した。これに対し、高駢は繰り返し激しい抗議の上奏を行い、『旧唐書』高駢伝が伝える最終上奏文では、王鐸を「敗軍之将」と痛罵しており、その憤懣が窺える[19]。朝廷はこれに対し、詔書をもって高駢を叱責したが、この詔書は『資治通鑑』によれば鄭畋が起草したものであった。さらに、『唐詩紀事』によれば、高駢は都統の職を失った後、「聞河中王鐸加都統」という皮肉の効いた詩を作った[20]。このように、高駢と王鐸・鄭畋との対立は極めて深刻であった。なお、鄭凝績は鄭畋の息子である。

(2) 周宝・裴虔余・時溥

周宝と高駢の不和は、『新唐書』周宝伝に明記されている[21]。一方、裴虔余と時溥はいずれも高駢と隣接する節度使であり、彼らと高駢との対立関係を伝える正史の記載は限られている。しかし、『桂苑筆耕集』に収められた文書を検討すると、高駢と裴虔余・時溥との緊張関係を示唆する記述が確認できる[22]。具体的には、裴虔余については、彼が宣歙観察使に就任する前と離任直前の二度にわたり、高駢が宣州の支配を試みたことで不和が生じた。高駢と時溥との間では、泗州の支配権をめぐる争いが対立の原因であった。

(3) 田令孜・陳敬瑄・裴徹・王徽

当初、田令孜は盧携と同盟し、盧携を通じて高駢とも良好な関係を維持していた[23]。そして、田令孜と陳敬瑄は兄弟として政治的にも緊密な関係にあった。しかし、高駢の敗戦責任を盧携に転嫁した田令孜の行動により、この同盟関係は破綻した[24]。そして、盧携に代わる新たな宰相として田令孜が推挙したのが王徽と裴徹であり、両者は盧携の失脚によって直接的な利益を得た人物であった。こうした政治的な再編の過程で、高駢は田令孜・陳敬瑄・王徽・裴徹一派と対立する構図が生まれたのである。

この対立関係を具体的に示す事例が、軍将・郭琪の亡命事件である。『新唐書』田令孜伝によれば、田令孜・陳敬瑄に反逆した郭琪は、陳敬瑄に敗れた後、高駢を頼って亡命したという[25]。敵対人物の受け入れというこの事実は、高駢と田令孜・陳敬瑄との対立を如実に物語るものと言えよう。

(4) 諸葛爽

高駢の諸葛爽への評価は他の史料では不明瞭だが、『桂苑筆耕集』には明確な批判がある。同書巻十「魏博韓簡侍中」において、高駢は諸葛爽を「豕食難飽、豺声易驕（豕のように貪欲で満足を知らず、豺のように傲慢な声をあげる）」と激しく非難しており、当時すでに唐に復帰していた諸葛爽と[26]、その敵対者である韓簡のいずれを支持するかという点で、高駢の政治的立場が明らかである。この一節は、高駢と諸葛爽の間に確執が存在したことを示す有力な証拠と言える。

以上見てきたように、正史の記載によれば、これらの人物はいずれも高駢と不和の関係にあった。しかし注目すべきは、崔致遠が『桂苑筆耕集』に収録した彼ら宛ての書簡の内容が、ごく一部の例外を除けば、ほとんどが感謝・慶賀・贈答に関するものであるという点である[27]。このことから、崔致遠は、現実には高駢と対立関係にあった人物宛ての書簡をあえて収録することで、高駢が彼らと良好な関係を保っていたかのようなイメージを意図的に構築しようとしたと考えられる。

(六) 劉鄴『甘棠集』との比較

これまでの五つの節では、高駢に向けられた五種類の流言と、崔致遠が『桂苑筆耕集』で反論しようとした試みについて論じてきた。これら五種の流言は、正史に記された高駢への非難をほぼ網羅しており、中和年間における高駢に対する主要な否定的風評を構成している。『桂苑筆耕集』前十一巻のうち、これらの流言を意識して収録されたと見なし得る作品は計 124 篇に及び、全体の約 82% を占める。さらに、南蛮との和睦や西川羅城の建設など、正史にも記録された旧功を記す文書も数篇含まれているが、これらもまた、高駢の政治的イメージを修復・強化するための作為的な編集方針の一環と解されよう。以上の点、とりわけ 82% という圧倒的な比率を踏まえるならば、『桂苑筆耕集』はまさにこれらの流言に応答し、高駢の汚名をそそぐことを目的として編纂されたと結論づけることができよう。

『桂苑筆耕集』の編纂に上述のような政治的意図が働いていたとすれば、それは唐代の四六集のなかで他に類例のない特質ということになる。現存資料から原貌が推察される令狐楚『表奏集』、李商隠『樊南四六』、劉鄴『甘棠集』などの四六集には、強い政治的意図は認められず、その編纂目的は専ら自己の文名の宣揚と文学的才芸の誇示にあったと理解される。特に時代的に最も近接する『甘棠集』と対比すると、その特徴は一層明確になる。敦煌でほぼ完本として発見された『甘棠集』は、劉鄴（830 年代～881）が華州刺史・高少逸の書記を務めた際の四六集である。収録文書の中で、宛先が皇帝である表状は、祥瑞を賀し、賜与を謝し、貢献を進め、親王の加官を賀し、公主の薨去を弔うものなどからなる。一方、宛先が官僚の場合は、基本的に賀官（昇進を賀する）や賀節（節慶を賀する）の文書が中心であり、特段の政治的意図を窺うことは困難である。詳細は表 4 に示す如くである。

表 4、『甘棠集』内容略表

宛先	宛先の身分	内容	篇数
崔鉉	宰相、淮南節度使	賀官	2
		賀節	2
令狐綯	宰相	賀官	1
裴休	宰相	賀官	1
魏謇	宰相	賀官	1
鄭朗	宰相	賀官	1
馬植	元宰相、陳許節度使	賀官	1
		賀節	1
白敏中	元宰相、西川節度使	賀節	3
杜悰	元宰相、淮南節度使	賀節	3
崔珙	元宰相、鳳翔節度使	賀節	1
王元逵	使相、成徳節度使	賀節	1
盧鈞	尚書左僕射	賀官	1
鄭涓	御史大夫	賀官	1
蕭寘	翰林学士承旨	賀官	1
沈詢	中書舎人知貢挙	賀官	1
杜審権	中書舎人	賀官	1
帰十九郎	補闕	辟任	1
裴識	鳳翔節度使	賀官	1
李汶儒	湖南観察使	賀官	1
土突土曄	驃騎大将軍	賀官	1
西門季玄	枢密使	賀官	1
崔某	宦官	賀官	1
	諸道節察	賀節	2
	両中尉並長官	賀節	2
	諸宰相	賀節	3
	翰林学士兼丞郎給舎	賀節	1
	両枢密使	賀節	1

表４から読み取れるように、賀官文書の宛先は当代の宰相および朝廷の重要職務の官であり、賀節文書の宛先が明らかなものはいずれも宰相または元宰相の節度使であった。また、「群体」としての宛先も同様に高位の地位にある者たちであった。すなわち、これらの儀礼文書が収録された理由は、宛先となった人物の政治的権威にほぼ起因するものであり、それ以外の要因――とりわけ編集者側の積極的な政治的意図――を想定する必要性は低い。劉鄴がこれらの文書を集成した意図は、むしろ自身が高位者向けの正式な文書を作成し得るという文学的資質を誇示する点にあり、そこに特段の政治的意図を看取する余地はほとんどない。この点において、『桂苑筆耕集』との決定的な差異が浮き彫りとなる。

では、『桂苑筆耕集』には、なぜこれら先行の四六集には見られなかった独自の編纂意図が胚胎したのか。この根源的な問いを解明することこそが、次章に課せられた課題である。

二、『桂苑筆耕集』の誕生――藩鎮転型期の視点から

以上見てきたように、崔致遠の『桂苑筆耕集』の編纂には、高駢に対する当時の批判的風評への反駁と、毀損された高駢の政治的イメージの再構築という明確な意図が看取される。そもそも高駢に対する世論の非難が圧倒的でなかったならば、崔致遠がこれほどまでに作為的な編集を行う必然性はなかったと言える。

では、高駢への不信と非難は何に起因するのか。唐朝廷が、殊更に高駢に対して厳格な姿勢を貫いた理由はどこにあったのか。さらに、崔致遠は高駢の置かれた政治的状況をどう理解し、いかなる論理で高駢を執拗に擁護したのか。

これらの問題を解く鍵は、当時の淮南が直面していた藩鎮転型期の政治的紛争にあると筆者は捉える。本章ではこの点を検証したい。

(一) 唐朝廷の憤怒

従来、高駢と唐朝廷及び他の朝臣との深刻な対立は、黄巣戦役での敗北に起因すると説明されることが多かった。しかし本研究は、その根本原因は、唐朝廷の最重要な経済的基盤であった淮南が、高駢の統治下で黄巣討伐の任を果たせなかったこと以上に、むしろ「著地化」し[28]、次第に朝廷の支配から離脱していった点にあったと考える。本稿で言う所の「著地化」は、従来の「割拠」概念とは次元を異にする。その脱中央への動きは、節度使という頂点からではなく、刺史・幕僚といった中間層によって先導された点に特徴があり、これが朝廷に深刻な脅威と映ったのである。高駢は、この「著地化」の流れを制御できなかったために、朝廷からの非難が格段に厳しいものとなった。周宝との比較を通じて、これらの論点を以下に論証する。

高駢と周宝は、その出身と経歴に共通点が多い。両者とも神策軍武将出身であり、黄巣鎮圧のために中原の藩鎮から東南に派遣された。さらに重要なのは、両者の統治した淮南と浙西が、藩鎮としての性格において非常に強い共通性を有していたことである。先行研究によれば、淮南と浙西はいずれも財源型の藩鎮に分類され、黄巣の乱以前は文官が節度使・観察使を務めるのが通例だった[29]。周宝もまた高駢と同様、乱鎮圧において積極的な軍功を残さなかった。にもかかわらず、両者の時評は著しい対照をなしている。『新唐書』周宝伝には「宝和裕、喜接士。以京師陥賊、将赴難、益募兵、号『後樓都』[30]（周宝は温厚で人付き合いが良く、士人を厚遇した。長安が賊の手に落ちた際には、難に赴こうとさらに兵を募り、『後楼都』と号した）」とあり、さらに「駢出屯東塘、約西定京師、宝喜、将赴之[31]（高駢が東塘に出て駐屯し、西進して京師を奪還することを約した時、周宝は喜んでこれに加わろうとした）」とも記されている。ここでは周宝が勤王の志に燃え、忠誠を尽くそうとした人物として描出されている。これは、両者の身分・経歴・行動

に表立った差異がほとんど認められないにもかかわらず、時評が截然と分かれていたことを示す。この一見して矛盾する現象を解釈するには、淮南と浙西という両藩鎮の「実態」の相違に着目する必要がある。

浙西鎮の状況は、李碧妍『唐鎮海軍研究』（上海大学 2008 年修士論文）に詳しい。同研究が指摘するように、黄巣の乱以前の浙西では、早くも地方勢力が台頭し、地域主導権を握り始めていた。こうした地方勢力による各州掌握の過程は周宝着任以前に始まっており、彼に責任を求めるのは適当ではない。この点を踏まえると、周宝の軍隊である「後楼都」設立は、勤王という表向きの目的を超えて、本質的には在地勢力に対抗するための軍事的基盤の構築と捉え直すべきだと思う。この見方は、後楼都と在地の鎮海軍（浙西の在地軍隊）が対立した際の周宝の対応からも裏付けられる。

> 宝与僚属宴後楼、有言鎮海軍怨望者、宝曰、「乱則殺之。」(32)
> 周宝が僚属と後楼に宴し、鎮海軍の怨望を聞き、「乱れあれば、これを殺せ」と言った。

この記述からも、周宝が着任後、浙西の在地勢力からの支配権奪回、すなわち「反著地化」を目指して尽力していたことが窺え、これは唐朝廷にとって極めて重要な方針であった。さらに注目すべきは、中和四年に朝廷が周宝の婿である楊茂実に代え、文官である趙載を蘇州刺史に派遣した事件である。客観的に見れば、朝廷のこのような決定は、周宝が在地勢力との力関係において一層劣勢となることを意味し、周宝自身もこの人事に不満を抱いていたが、彼は朝廷の命令に従った。このような対応から、唐朝廷が周宝の統治姿勢を基本的に是認していたことは容易に理解できる。

一方、高駢治下の淮南は、事情を異にしていた。浙西では、黄巣の乱以前でも、山地が多く地形が険しいために賊徒の横行が頻発し、官軍の対応能力を凌駕していた。この治安の空白を埋めるべく、地方豪族が自発的に郷勇を組織し、その勢力を漸次拡大させていったのである。しかし、淮南はこれとは異なる経緯を辿った。黄巣の乱以前の淮南は賊徒の横行が深刻ではなく、仮に発生しても官軍の力で鎮圧可能であった。高駢就任以前の巡属刺史は、現存する記録から確認できる限り、すべて朝廷から派遣された文官であった。すなわち、高駢就任前の淮南に対する朝廷の統制は、なお堅固に維持されていたのである。

朝廷が高駢を淮南に派遣するに当たって想定していたのは、かつて唐懿宗の治世に龐勛の乱を平定した馬挙の事例であった可能性がある。すなわち、神策軍出身の武将が他藩鎮から淮南に赴任し、麾下の兵力をもって反乱を迅速に鎮圧した後、速やかに離任し、淮南鎮の従来の権力構造に手を加えないというモデルである(33)。だが黄巣の破壊力は龐勛とは比較にならぬほど大きく、高駢は淮南で従来にない大規模な体制変革を実行せざるを得なかった。その結果、新興の在地勢力や元黄巣軍の降将らが急速に淮南の実権を掌握し、やがて高駢自身の権力をも形骸化させていったのである。この過程については次節で詳述する。

要するに、高駢治下の淮南では、刺史層からの朝廷支配からの離脱が進行した。そして、淮南の事実上の喪失は、唐朝中央にとって、経済的に依存する最後の財政的生命線を断たれることを意味していた。黄巣との戦いにおける高駢の失策はあくまで誘因に過ぎず、朝廷が真に危機感を抱き、激怒したのは、この淮南の「著地化」そのものであった。朝廷の高駢に対する不信感は急速に増大し、それに伴う非難も先鋭化の一途を辿り、ついには修復不可能なまでに先鋭化したのである。

（二）高駢の苦境

崔致遠が捉える高駢像は朝廷のそれとは明らかに異なり、高駢の置かれた困難な立場への同情が窺われる。当時、唐朝廷は高駢に割拠の野心ありと疑っており、『旧唐書』高駢伝には「孫策の三分の計を為す」との批判的記述さえ見られる。しかし、高駢は淮南の「著地化」に対して、事実上有効な手立てを講じ得なかった。

まずは経済問題が挙げられる。山根直生が指摘するように[34]、高駢麾下の中核部隊は淮南本来の軍団ではなく、他藩鎮から率いてきた旧将部隊であり、その軍費は本来、出身藩鎮が負担すべきものだった。しかし、黄巣の乱による国家財政の崩壊で、このような藩鎮を跨ぐ財政支給は不可能となり、兵士の逃亡が相次ぎ、軍の戦闘力低下は避けがたい結果となった。この危機に対処すべく、高駢は長期にわたる大軍維持のための財政機構再編に着手せざるを得ず、広明元年には早くも改革を開始していた。具体的には、同年二月に揚州・揚子院に発運使を設置し、淮南周辺の塩専売に関わる財政機構と権限を統轄する体制を整えた。高駢は、これら本来唐朝中央政府の管轄下にあった機構を確実に掌握するため、地元の事情に通じた自らの腹心を派遣せざるを得なかった。これが、淮南の在地勢力である呂用之一派が急速に台頭する基盤を形成することとなったのである。

かくして、淮南本鎮の財政は軍費を自弁できる体制へと転換した。従来「妖人」と見なされてきた呂用之らは、高駢が財政難対策としてやむなく登用した改革推進の実務グループとして台頭し、経済力にものをいわせて政界の中心に躍り出たのである。呂用之らが淮南経済の中枢で重要な役割を担っていた事実は、『資治通鑑』の以下の記述からもうかがえる。

> 用之侍妾百余人、自奉奢靡、用度不足、輒留三司綱輸其家。[35]
>
> 呂用之は百余人の侍妾を抱え、奢侈に耽り、自らの家計が不足すると、そのたびに三司の綱輸を留めて、自邸に送らせた。

この記述から、淮南の経済実権が呂用之一派に移行していた実態と、それが高駢による朝廷への賦税納入不能の一因となっていたことが推察される。

さらに看過できないのは、呂用之一派が経済面での優位を確立した後、速やかにその影響力を軍事面へ拡大していった点である。これは従来の研究で十分に検討されてこなかった。『資治通

鑑』には、「用之又欲以兵威脅制諸将、請選募諸軍驍勇之士二万人、号左右莫邪都[36]（呂用之はさらに兵力をもって諸将を脅迫・制御しようとし、諸軍から勇猛な兵士二万人を選抜・募集することを請求し、左右莫邪都と号した）」と記されている。

呂用之一派の在地勢力の台頭は節度使の幕府に留まらず、楊行密らによる各属州の実権掌握という形で、淮南全域に及び、その支配構造を経済面から軍事面へ、上層から下層へと貫いていった[37]。

しかし、淮南の支配権を在地勢力が一元的に掌握したわけではない。そこには、元黄巣軍の降将勢力という強大な競合勢力が並存していた。高駢が浙西で投降させた秦彦・畢師鐸らは、もはや殲滅できる状態にはなく、唐朝廷にも高駢自身にも彼らを完全に制圧する力は残されていなかった。だからこそ、叛乱の再発を防止するため、刺史などの要職を与え厚遇する懐柔策を採らざるを得なかった。現存史料によれば、孫端・李罕之・許勍・趙詞・秦彦らはいずれも刺史に任じられ、淮南のほぼ半分を掌握した。畢師鐸は淮南左廂都知兵馬使へ昇進し、降将勢力の事実上の領袖となった。

かくして、降将勢力と在地勢力の二大派閥の台頭のなかで、高駢の本隊たる旧将集団は急速にその地盤を失った。彼が淮南に率いてきた兵士は経済困窮から離散を始め、最も信頼していた張璘は黄巣軍との戦闘で戦死し、他の旧将も次第に疎遠となっていった。『広陵妖乱志』によれば、

> 先是渤海旧将有梁纘、陳珙、馮綏、董瑾、公楚、帰礼、日以疏退、渤海至是孤立矣。[38]
>
> かつて高駢には梁纘、陳珙、馮綏、董瑾、兪公楚、姚帰礼といった旧将がいたが、日を追うごとに次々と離れていき、高駢はここに至ると孤立してしまった。

とある。降将勢力と在地勢力が淮南の主要な軍事・財政資源を掌握した以上、高駢がその旧将たちと疎遠になっていくのは必然的な帰結であった。例えば、在地勢力の呂用之らは高駢の側近である兪公楚・姚帰礼らに圧力を加え[39]、一方、降将勢力の孫端は高駢の旧将の梁纘を攻撃して和州を奪取していた[40]。したがって、旧将たちとの疎遠は高駢による作為的な排除の結果ではなく、むしろその権力基盤の崩壊がもたらした必然的な帰結と解すべきである。

嫡系勢力の弱体化により、中和年間の高駢は在地勢力と降将勢力の双方に対する統制力を喪失し、完全に孤立していた。この権力の真空状態が、両勢力の直接的な軍事衝突を誘発し、高駢はその結果、命を落とすに至った。

ここで、高駢が淮南で黄巣討伐ための積極的な軍事行動を起こさなかった理由について、『旧唐書』高駢伝の以下の記述を再考したい。

> 駢怨朝議有不附己者、欲賊縦横河洛、令朝廷聳振、則従而誅之。大将畢師鐸曰、「妖賊百万、所経鎮戍若蹈無人之境。今朝廷所恃者都統、破賊要害之地、唯江淮為首。彼衆我寡。若不拠津要以撃之、俾北渡長淮、何以扼束、中原陥覆必矣。」駢駭然曰、「君言是也。」即令出軍。有

愛将呂用之者、以左道媚駢、駢頗用其言。用之懼師鐸等立功、即奪己権、従容謂駢曰、「相公勲業高矣、妖賊未殄、朝廷已有間言。賊若蕩平、則威望震主、功居不賞、公安税駕耶。為公良畫、莫若観釁、自求多福。」駢深然之、乃止諸将、但握兵保境而已。(41)

高駢は、朝廷内で自分に従わない者を恨み、（黄巣の）賊軍が黄河・洛水の地域を横行し暴れ回るように仕向け、朝廷を震撼させてから、それから討伐しようと考えた。大将の畢師鐸は「賊軍は百万もの大軍で、通過する守備地はまるで無人の境を行くがごとくです。今、朝廷が頼みとしているのは都統（高駢）であり、賊を撃破するための要害の地は、何よりも江淮地方が最重要です。敵は多勢で我々は無勢です。もし渡河地点などの要衝を占拠して迎撃しなければ、賊に淮河を北へ渡らせてしまったら、我々にどうして制御できましょうか。中原の地が陥落するのは必定です」と進言した。高駢ははっと驚いて「君の言う通りだ」と言い、すぐに出軍を命じた。高駢には寵愛する呂用之という将軍がおり、呂は道教方術で高駢に取り入り、高駢は彼の言うことを大いに採用していた。呂用之は、畢師鐸らが戦功を立てて自分の権力を奪うことを恐れ、落ち着いた様子で高駢に言った。「相公は既に功績が高かった。しかし賊がまだ滅びぬうちから、朝廷では既に（相公に対する）誹謗や讒言がございます。もし賊を平定してしまえば、その威望は皇帝をも脅かすほどになり、賞しきれないほどの功績を立てれば、果たして安泰に身を引くことができましょうか。相公のためを思えば、最善の策は（賊と朝廷の）隙を観て、ご自身の安泰を図ることです」と。高駢はこれを深くもっともだと思い、諸将を止めさせ、ただ兵権を握って国境を守るだけにとどめた。

従来の研究は、この高駢・畢師鐸・呂用之の三者それぞれの発言内容そのものに焦点を当ててきたが、筆者が着目するのは、このやり取りを通して浮き彫りになる、淮南陣営内部の深刻な対立と相互不信の構造である。つまり、呂用之（在地勢力）が反対する限り、畢師鐸（降将勢力）が出兵を主張しても、高駢は容易に決断を下せないという政治力学が働いていた。淮南の二大勢力が足並みを揃えられず、むしろ互いに牽制し合う状況下では、組織的な出兵は事実上、不可能だったのである。以上から、高駢が出兵しなかったのは外的要因ではなく、転型期の淮南で「著地化」が進行し、節度使である高駢自身の統治権が空洞化していたという内的な政治構造こそがその本質的原因であった。このような難局に直面して、高駢自身も無念の思いを抱えていたと推察される。

以上の分析を前提に、『桂苑筆耕集』巻十二の編纂意図を考察したい。同巻はほぼ例外なく、高駢が淮南の在地軍閥に発した「委曲」（下行文書の一種）で構成され、その概要は表５の通りである。

表 5、『桂苑筆耕集』巻十二内容略表

篇名	書簡内容	宛先の身分
滁州許勍	許勍の妻たる劉氏が軍に随って征討に赴く忠誠を称揚する	滁州刺史
盧江縣令李清	その治軍の功績を讃える	盧江縣令
淮口鎮李質	李再興の叛乱を平定したことを称揚する	淮口鎮将
光州李罕之	今後黄巣平定のために功を建てるよう勉励する	光州刺史
帰順軍孫端	未だ官職を得ていない心情を宥撫する	黄巣降将
楚州張雄	黄巣討伐に出兵したことを賞賛する	楚州刺史
楚州張義府	張義府の過失を許し、慰撫する	楚州刺史
滁州許勍	許勍に対し、浙西の周宝の誘引に応じぬよう戒告する	滁州刺史
壽州張翺	王鐸に随って黄巣を攻撃したことを称揚する	壽州刺史
盧州楊行敏	その州に祥瑞が得られたことを賀し、忠勤を勧勉する	盧州刺史
和州秦彦	贈羊の厚意に謝する	和州刺史
盧伝	武寧県に在任した際の功績を賞賛し、今後も努力を励ます	某州の刺史
戴盧	県の統治における功績を称揚する	某県の県令
光州王緒	王緒の反叛を譴責する	光州刺史
楚州営田判官綦毋蘋	その功績を賞し、兼判順国軍糧料に任ずる	楚州営田判官
鄆州耿元審	今後の勲業を勉励する	鄆州刺史
海陵鎮高霸	右散騎常侍に昇任したことを賀し、引き続き勲業を勉励する	海陵鎮将
淮口李質	右衛大将軍に昇任したことを賀し、引き続き勲業を勉励する	淮口鎮将

実は、これらの文書を詳細に検討すると、当時、淮南支配下の諸在地勢力が次第に高駢の統制から離脱しつつあった兆候を窺い知ることができる。当時の淮南域内には軍鎮が林立し、県令ですら私兵を召集する権限を有していた。例えば「戴盧」には、県令である戴盧が「義軍を糾集す」と記されている。また、各地に割拠した小規模軍閥の間で反乱が頻発していた。「淮口鎮李質」には李再興の叛乱が、「光州王緒」には王緒の叛乱が言及されている。「滁州許勍」においては、

> 訪知近日浙西周相公頻差上元鎮使馬暨、専齎書曲、兼将金銀送到和州、説誘秦彦、令帰浙岸、許授雲川。信使継来、事情甚細。則未知秦彦終欲如何。
>
> 近頃、浙西の周宝がたびたび上元鎮使の馬暨を使者とし、専ら書簡と財宝を携えて和州に送り、秦彦を説き誘って浙西に帰順させようとし、雲川の地を授けると約束していることを探知した。使者が継ぎ来たり、情勢は細部まで明らかである。しかし、秦彦が結局どうしようと考えているかは、まだ知ることができない。

と記されており、この記述からは、秦彦の離反の意図を知りながら高駢が有効な手立てを講じられなかったことが読み取れる。

しかしながら、崔致遠がこれらの文書を選んだ主たる意図は、高駢が如何にして領内の刺史・

県令を統制下に置こうと努めていたかを示す点にあった。表５が示すように、総体的にこれらの文書において高駢は常に在地勢力者に対し唐朝廷のために功績を立てるよう勧告している。とりわけ「光州李罕之」「楚州張雄」「壽州張翺」などの篇目では、彼らが黄巣の乱平定に参与した功績を直接的に賞賛している。また、離反の意図を抱く将領に対しては、高駢は「兵食可去、無信不立。則知守信之道、乃是立身之本歟。苟若壊隳、自為顛覆（軍隊と糧食は欠くことがあっても、信用を失っては立つことができない。すなわち、信義を守るという道こそ、身を立てる根本であると知るべきであろう。もしこれを自ら破り捨てるようなことがあれば、結局は自ら身を覆すに至る）」（巻十二「滁州許勍」）と、厳しく戒めている。要するに、これらの選文は、属下州県の「著地化」を食い止めようとした高駢の主体的な努力を示すものであった。

換言すれば、本稿前半で論じたように、『桂苑筆耕集』前十一巻の主要目的が高駢対する非難への反駁であったとすれば、巻十二は、高駢の根源的な危機、すなわち支配構造の解体に対する彼の抵抗を示すものと位置づけられる。

（三）崔致遠の意図

崔致遠が『桂苑筆耕集』の編纂にこれほど政治的配慮を込めた個人的な背景には、二つの要因が考えられる。第一に、彼が淮南政局の複雑さと高駢の困難な境遇を深く理解し、高駢に関する風評の中には事実と異なる部分が含まれていることを認識していた。第二に、高駢から受けた厚恩に報いるため、崔致遠は高駢の為に彼の立場を弁明しようとした。

まず第一点について、都統巡官として高駢の文書作成を司った崔致遠は、幕府の枢要な地位にあり、機密決定には直接関与しなかったものの、あらゆる公文書に接する立場から、淮南の内情に通暁していた。このことは、巻十九に収録された私信の宛先選定から明らかである。

巻十九に収録される崔致遠の私信のうち、淮南幕府関係者宛のものについて見ると、高駢本人

表 6、『桂苑筆耕集』巻十九内容略表

宛先	篇名	書簡内容	宛先の身分
宋絢	謝宋絢侍御書	宋絢に官車を借与されたことへの謝意	高駢の営田判官
高四十三郎	謝高秘書示長歌書	高四十三郎より詩を贈られたことへの謝意	高駢の息子
李琯	謝李琯書	李琯の引薦に対する謝意	高駢の幕僚
元郎中	謝元郎中書	転任後、元郎中からの祝賀に対する謝意	高駢の幕僚
周繁	謝周繁秀才以小山集見示書	周繁より贈られた『小山集』への謝意	郷貢進士、高駢の幕僚
張翺	与壽州張常侍書	張翺の寿州統治における功績を称揚する	壽州刺史
張義府	賀楚州張義府尚書	張義府の楚州刺史任官を祝賀する	楚州刺史

を除き、現時点で身分を確認できるのは、宋絢・高四十三郎・李琯・元郎中・周繁・張翺・張義府ら数名に限られる。詳細は表６に示す通りである。

宋絢・李琯・元郎中・周繁ら文職幕僚は高駢に直属し、独立した政治的基盤を持たなかった。その中でも、李琯は高駢の西川時代からの古参の側近であった（『桂苑筆耕集』巻十三「請節度判官李琯大夫充副使」参照）。また、高四十三郎は高駢の息子であり、明らかに嫡系の一員であった。張翺と張義府は兵を率いる州刺史であるが、現存史料上、中和年間において両者が派閥抗争に直接関与した形跡は確認できない。したがって、崔致遠が『桂苑筆耕集』巻十九において、彼ら宛ての書信を収録し、良好な関係を強調したことは、政治的には中立かつ安全な選択であったと評価できよう。

一方、呂用之・畢師鐸・秦彦・諸葛殷・張守一らは、先に述べたように、高駢の権力を次第に形骸化させ、淮南の実質的な支配権を掌握しようとした勢力の代表格であり、淮南の「著地化」を推進した中心的な存在であった。当時の慣行に照らせば、崔致遠が彼らと一切書簡を交わさなかったとは考えにくい。しかし、それらの書簡は『桂苑筆耕集』に一切収録されていない。同様に、顧雲が崔致遠の友人であったと伝えられるが[42]、巻十九・巻二十には両者の交流を窺わせる記録は見当たらない。これは、顧雲が特定の派閥と深く結び付いていたことによる可能性が考えられる[43]。以上の点から、崔致遠は自らを淮南の政治闘争から距離を置き、いかなる派閥にも与しない中立な立場に立ち、それを編集方針としたのであろう。このように、崔致遠が淮南の政局を正確に把握し、高駢の困難な立場を深く理解していたことが、その編纂態度を決定付けたのである。

そして、高駢の崔致遠に対する恩遇が、彼に強い政治的意図をもって『桂苑筆耕集』を編纂させた直接的な要因であった。高駢の恩遇は、『桂苑筆耕集』巻十七・十八・二十の諸篇に具体的に示されている。これら三巻には、崔致遠が高駢幕府に加わって以降、高駢に宛てた数十篇に及ぶ啓文が収録されており、その多くは謝恩を内容とするものである。高駢は崔致遠に対し、度重なる官職の昇進のみならず、衣服や食物など日常的な物品に至るまで、絶えず恩恵を施していた。さらに、崔致遠が幕府を離れる際には厚く餞別し、帰国の途上にも使者を遣わしてその安否を気遣ったことが、巻二十の記事から確認される。このような並々ならぬ厚遇は、崔致遠にとって決して忘れることができないものであり、『桂苑筆耕集』の編纂の強い動機となったのである。

その感謝の情は、淮南を離れた後に高駢へ献じた以下の詩に最も明瞭に表出している。

> 秋去春来能守信、暖風凉雨飽相諳。再依大厦雖知許、久汚雕梁却自慚。深避鷹鸇投海島、羨他鴛鷺戯江潭。只将名品斉黄雀、独譲銜環意未甘。（『桂苑筆耕集』巻二十「帰燕吟献太尉」）
>
> 秋が過ぎ春が訪れるのは、あたかも約束を守っているかのようで、すでに暖かな風や涼しい雨の気配にもすっかり慣れ親しんでいる。再び高楼に寄り添うことが許されていると知りながらも、長らく宮殿の彫梁を汚してきたことを、むしろ自ら恥じている。鋭い鷹や鷲を遠

く避けて海島に身を寄せ、鴛や鷺が江辺で遊ぶ様をただ羨むばかりである。かつて恩返しの黄雀にならいたいと願った私であり、玉環を銜えて恩に報いた黄雀に及ばぬままであることを、ただ甘んじて受け入れられない。

「深避鷹鸇投海島（鋭い鷹や鷲を遠く避けて海島に身を寄せる）」という表現は、崔致遠の淮南離脱・帰国の理由は、当地の複雑な政治環境にあったことを示唆している。また、末聯で黄雀が玉環を銜えて恩に報いたという典故は、崔致遠がいずれ高駢の恩に報いんとする意志の表明である。以上述べてきたように、『桂苑筆耕集』は崔致遠による高駢への恩返しの所産と理解することができよう。

『桂苑筆耕集』の成立は、唐末における藩鎮体制の変容という歴史的潮流と切り離せない。淮南の「著地化」は唐朝廷に深刻な脅威と異常なまでの憤激を引き起こし、それが唐朝廷の高駢に対する過激な非難として現れた。他方、高駢自身も、藩鎮内部の権力構造の複雑化や軍権の動揺により、実質的な統治能力を大幅に制約されていた。こうした状況下で、崔致遠は、朝廷や世論による過剰かつ虚偽を含む非難に対し、高駢の現実的な「無力」こそがその行動の真相であると認識し、そこに深く同情を覚えた。高駢は正史が描くような主導的立場にはなく、中央と地方勢力の板挟みとなり、むしろ時代の政争の渦に翻弄された存在であった。これに対し、異国出身の文士という立場にあった崔致遠は、高駢の庇護への恩義に応えるべく、言論をもってその弁明に努めた。『桂苑筆耕集』の編纂は、まさにそのための、彼にとって最も有効かつ実行可能な手段であったと言える。

三、おわりに

『桂苑筆耕集』に収録された文書の最終的な年代から判断すれば、本集が崔致遠の新羅帰国後に編纂されたことは明らかである。一方、『新唐書』芸文志や『崇文総目』といった中国本土の書目にも本集が収録されている事実は、崔致遠が文集完成後に、意図的にこれを中国へ「還流」させた可能性を示している。もしこれが事実であるならば、崔致遠が四六文集を中国に流布させようとした意図は、既述の通り、本集を媒介として高駢の政治的イメージを修復し、その積極的評価を定着させることにあったと理解できよう。本集に収録された文章の八割以上が当時高駢に広く流布した批判的言説への意図的応答であることを踏まえると、本集は高駢の立場を明確化することを目的として戦略的に編纂されたものと理解される。『桂苑筆耕集』は、文人の内面意識や編纂態度がいかに政治情勢の影響を受けたかを如実に示しており、政治文化と文学活動の相互浸透を考察するうえで、きわめて貴重な事例を提供している。

注

（1）「四六」と「四六集」の定義について、拙作「中唐『文道観』的重構与『四六』概念的誕生」、『漢語言文学研究』2025年第2期、第32–42頁参照。

（2）例えば、田廷柱「論『桂苑筆耕集』的史料価値―兼評高駢其人」、『遼寧大学学報（哲学社会科学版）』1996年第5期、山根直生「唐朝軍政統治的終局与五代十国割拠的開端」、『浙江大学学報（人文社会科学版）』2004年第3期、陳志堅「唐末中和年間徐泗揚兵争之始末―崔致遠『桂苑筆耕集』事箋之一」、『魯東大学学報（哲学社会科学版）』2008年第5期などの先行研究が挙げられる。

（3）中村裕一『唐代公文書研究』、汲古書院、1996年、中村裕一『唐代官文書研究』、中文出版社、1991年参照。

（4）濱田耕策『古代東アジアの知識人崔致遠の人と作品』、九州大学出版会、2013年参照。

（5）例えば、「樊川文集序」に「（杜牧）遷中書舎人、始少得恙、尽捜文章、閲千百紙、擲焚之、才属留者十二三」とある（何錫光校注『樊川文集校注』、巴蜀書社、2007年、第1頁）。

（6）本稿における『桂苑筆耕集』の引用原文は、全て党銀平校注『桂苑筆耕集校注』（中華書局、2007年）を底本とする。

（7）陳燁軒の研究が示す通り、高駢が「叛臣」として描かれるに至った経緯は、当時の負面的世論と不可分である。そもそも10世紀成立の『広陵妖乱志』がそうした負面的世論の集大成であり、後世の両『唐書』や『資治通鑑』といった正史も、高駢の淮南での事績を基本的に『広陵妖乱志』に依って叙述している（陳燁軒「高駢的野心――晩唐的朝廷、淮南節度使和揚州社会」、『中華文史論叢』2020年第4期、241–268頁参照）。したがって、正史における高駢批判は、高駢在世当時の風評をほぼ直接的に伝えるとみなすことができる。

（8）例えば、田廷柱「論『桂苑筆耕集』的史料価値―兼評高駢其人」（『遼寧大学学報（哲学社会科学版）』1996年第5期）では、主として前十二巻を素材として『桂苑筆耕集』の史料的価値が検討されている。

（9）孫永如「高駢史事考辯」、『唐史論叢』第5輯、三秦出版社、1990年、第208–222頁、党銀平『桂苑筆耕集校注』、第774頁、山根直生「唐朝軍政統治的終局与五代十国割拠的開端」、『浙江大学学報（人文社会科学版）』2004年第3期参照。

（10）『資治通鑑』巻二五三、中華書局、1956年、第8229頁。

（11）解職の具体時点について、夏婧「『桂苑筆耕集校注』匡補」、『域外漢籍研究集刊』、2014年、第215–248頁参照。

（12）『新唐書』巻二二四下「高駢伝」、中華書局、1975年、第6395–6396頁。

（13）例えば、巻十「鄂州崔紹大夫」に「某夙練戎韜、願裨王略。不愧於管天錐地、猶勤於撮壌導涓。遂敢累貢忠誠、冀廻聖鑑。儻或六竜下峡、豈同五馬渡江。中朝之礼楽無虧。下武之功猷斯在」とある。更に、巻二「請巡幸江淮表」「請巡幸第二表」では、皇帝の行在たる蜀と比較して淮南の優位性を具体的に列挙し、そこが朝廷再興の本拠地たり得ることを理路整然と論証している。

（14）例えば、巻一「賀殺戮黄巣徒伴表」に「臣謬操鈇鉞、尚点鼓鼙。未唱凱歌、唯知扑舞。顧彭野之久妨道路、怒髪雖衝、望秦原而将滅煙塵、愁眉已展」とある。

（15）例えば、巻二「讓官請致仕表」に「二年忝都統之名、不能誅奸戮暴。四載主銅塩之務、不能富国贍軍。是以兵権則屢見改移、利柄則変為分割。凡此辱君之命、莫非職臣之由。臣猶自知、況在陛下。擢髪而既難数罪、乞骸而唯願辞栄」とある。

（16）宮薗和禧『唐代貢献制の研究』序、九州共立大学地域経済研究所、1988年、第2頁、張国剛『唐代藩鎮研究（増訂版）』第十三章「唐代進奉試析」、中国人民大学出版社、2010年、第159–167頁参照。

（17）例えば、「進漆器状」には、漆器一万五千九百三十五点を進献したことが記されている。また、「進御

衣段状」には、御衣段九千六百七十八段を進献したことが記されている。さらに、「進綾絹錦綺等状」には、綾・絹・錦・綺など十万点を進献した旨が記載されている。

(18) 『新唐書』盧携伝に「初、王仙芝起河南、携表宋威、斉克譲、曾衮皆善将、為招討使。及威殺尚君長、賊熾結、益不制、乃以王鐸鎮荊南為諸道都統。携不悦。是時、黄巣已破広州、勢張甚、表求天平節度使、詔宰相百官議。携素厚高駢、属令立功、乃固不可巣請、又欲激巣使戦而敗鐸、因授率府率。又徇駢与南詔和親、与畋争、相恨詈、繇是罷為太子賓客、分司東都。俄為兵部尚書。会駢将張璘破賊、帝復召携、以門下侍郎同平章事。及鐸失守、以駢代之、即按関東諸将為鐸・畋所任者、悉易置」とある(『新唐書』巻一八四「盧携伝」、中華書局、1975 年、第 5398–5399 頁)。

(19) 『旧唐書』巻一八二「高駢伝」、中華書局、1975 年、第 4705 頁参照。

(20) 「聞河中王鐸加都統」に「煉汞焼鉛四十年、至今猶在薬炉前。不知子晋縁何事、只学吹簫便得仙」とあり、修仙を隠喩的に用いつつ、その真意は、高駢自身が四十年にわたり戦場で功を重ねながら罷免されたのに対し、王鐸は何の軍功もなく、都統の地位を得たことへの批判的意味を込めたものである。

(21) 『新唐書』周宝伝に「駢為都統、浸不礼宝、宝銜之。帝在蜀、淮南絶貢賦、譖言道浙西為宝剽阻。帝知其誣、不直駢、自是顕隙。駢出屯東塘、約西定京師、宝喜、将赴之、或曰、『高氏欲図公地。』宝未信。駢遣人請会金山、謀執宝、宝答曰、『平時且不聞境上会、況上蒙塵、宗廟焚辱、寧高会時耶。我非李康、不能為人作功勲、欺朝廷也。』駢遣人切譲、宝亦詬絶之」とある(『新唐書』巻一八六「周宝伝」、第 5417 頁)。

(22) 陳志堅「唐末中和年間徐泗揚兵争之始末――崔致遠『桂苑筆耕集』事箋之一」、『魯東大学学報(哲学社会科学版)』2008 年第 5 期、徐暁峰「晩唐詩人裴虔余事蹟略考」、『古籍整理研究学刊』、2012 年第 1 期参照。

(23) 『新唐書』田令孜伝に「宰相盧携素事令孜、毎建白、必阿邑倡和」とある(『新唐書』巻二〇八「田令孜伝」、第 5884 頁)。盧携伝にも「(盧携)内倚田令孜、而外寄戎政於駢」とある(『新唐書』巻一八四「盧携伝」、第 5398 頁)。

(24) 『旧唐書』僖宗紀に「(広明元年)十二月庚辰朔。辛巳、賊拠潼関。時左軍中尉田令孜専政、宰相盧携曲事之、相与誤謀、以至傾敗。令孜恐衆罪加己、請貶携官、命学士王徽、裴徹為相。甲申、宣制以戸部侍郎、翰林学士王徽、裴徹本官同平章事。貶右僕射、門下侍郎、平章事盧携為太子賓客。携聞賊至、仰薬而死」とある(『旧唐書』巻十九下「僖宗紀」、第 689 頁)。

(25) 『新唐書』田令孜伝に「初、成都募陳許兵三千、服黄帽、名黄頭軍、以捍蛮。帝至、大労将士、扈従者已賜、而不及黄頭軍、皆窃怨令孜。令孜置酒会諸将、以黄金樽行酒、即賜之。黄頭将郭琪不肯飲、曰、『軍容能易偏恵、均衆士、誠大願也。』令孜目曰、『君有功邪。』答曰、『戦党項、薄契丹、数十戦、此琪之功。』令孜嘻怒曰、『知之。』密以酖注酒中。琪飲已、馳帰、殺一婢、吮血得解。因夜焼営、剽城邑。敬瑄討敗之、奔広都、遂走高駢所」とある(『新唐書』巻二〇八「田令孜伝」、第 5884 頁)。

(26) 『資治通鑑』によれば、中和二年八月に「魏博節度使韓簡亦有兼併之志、自将兵三万攻河陽、敗諸葛爽于修武。爽棄城走、簡留兵戍之、因掠邢、洺而還」とある(『資治通鑑』巻二五五、第 8274 頁)。「魏博韓簡侍中」にある「一陣才施、三城遂復」とは、この史実を指していると思われ、この文が中和二年八月以降に作成されたことが分かる。

(27) 例えば、『桂苑筆耕集』において王鐸に宛てた文書は、計八篇収められている。巻七「滑州都統王令公三首」はいずれも王鐸の栄転を祝う文書であり、巻八「滑州王令公」は王鐸からの賀状に対する返書である。巻九「都統王令公三首」のうち、第一篇は黄巣討伐の出兵を議する文書であり、第二・第三篇はいずれも安否を問いつつ親交を通ずる文書である。巻十「都統王令公賀冬至」は冬至を賀する文書である。つまり、いずれも感謝・慶賀・贈答に関する文書である。

(28) 「著地化」という用語は、管見の限りでは、胡耀飛「黄巣起義対晩唐藩鎮格局的影響」(『文史哲』2017

年第4期）がその初出である。胡氏は同論文でこの用語に明確な定義を与えてはいないが、その文脈から判断するに、藩鎮が整体として中央の制御から離脱する過程を指しており、その意味内容は「割拠」とほぼ同義であり、本稿における用法とは一致しない。もっとも、胡氏も同論文で、黄巣の乱後期に東南地域の地方勢力が高駢や周宝らを打倒する機会を捉え、各州で自立化を進めたことを指摘している。

(29) 張国剛『唐代藩鎮研究（増訂版）』、第81頁、王援朝「唐代藩鎮分類芻議」、『唐史論叢』第5輯、三秦出版社、1990年、第107–111頁参照。

(30) 『新唐書』巻一八六「周宝伝」、第5416頁。

(31) 『新唐書』巻一八六「周宝伝」、第5417頁。

(32) 『資治通鑑』巻二五六、第8345頁。

(33) 龐勛の乱については、傅挙有「唐末龐勛起義」、『史学月刊』1956年第8期、22–28頁参照。馬挙は咸通十年（869）二月に淮南節度使・南面行営諸軍都統に任ぜられたが、龐勛の乱平定後、咸通十一年十二月に文官の李蔚によって交替させられ、その在任期間はわずか一年にとどまった。吴廷燮『唐方鎮年表』巻五、中華書局、1980年、736頁参照。

(34) 山根直生「唐朝軍政統治的終局与五代十国割拠的開端」、『浙江大学学報（人文社会科学版）』2004年第3期参照。

(35) 『資治通鑑』巻二五四、第8267頁。

(36) 『資治通鑑』巻二五四、第8267頁。

(37) 楊行密は盧州の出身であり、『新唐書』僖宗紀によれば、中和二年に「盧州将楊行密逐其刺史郎幼復」とあり、高駢の嫡系である郎幼復から故郷である盧州を奪った。楊行密と呂用之の関係については、史料から明確に確認できる。『資治通鑑』に「用之密以語楊行滔云、『公楚、帰礼欲襲盧州。』行滔発兵掩之、二将不為備、挙軍尽殪、以二将謀乱告駢。駢不知用之謀、厚賞行滔」とある（『資治通鑑』巻二五五、第8291頁）。兪公楚と姚帰礼もまた高駢の旧将であり、呂用之と楊行密が共謀して彼らを殺害したことがわかる。また、その後に畢師鐸が挙兵した際も、呂用之は真っ先に楊行密に救援を求めている。これにより、二人が同じ派閥に属していたことが明白である。

(38) 『太平広記』巻二九〇「呂用之」、中華書局、1961年、第2304–2305頁。

(39) 『資治通鑑』に「用之密以語楊行滔云、『公楚、帰礼欲襲盧州。』行滔発兵掩之、二将不為備、挙軍尽殪、以二将謀乱告駢。駢不知用之謀、厚賞行滔」とある（『資治通鑑』巻二五五、第8291頁）。

(40) 『通鑑考異』引『妖乱志』に「中和三年、高駢差梁纘知和州。纘以孫端窺伺和州已久、不如因而与之以責其効。駢強之、既行、果為端所敗。及帰、和州尋陥於端」とある（『資治通鑑』巻二五七、第8356頁）。

(41) 『旧唐書』巻一八二「高駢伝」、第4704頁。

(42) 竹村則行「新羅・崔致遠と晩唐・顧雲の交遊について」、『文学研究』巻100、第27–50頁参照。

(43) 『南部新書』丙に「高駢章疏不恭、皆顧雲之辞也。駢後謂左右曰、『異日朝廷以不臣見罪、此輩寧無赤族之患耶。』」とある（銭易撰、黄壽成点校『南部新書』、中華書局、2002年、第39頁）。また、『新唐書』高駢伝にも「而呉人顧雲以文辞縁沢其奸、偃然無所忌畏」とある（『新唐書』巻二二四下「高駢伝」、第6395–6396頁）。このような唐朝に対して反抗的な態度を示した顧雲の政治的傾向は、崔致遠が『桂苑筆耕集』を編纂する際に、顧雲宛ての書簡を収録しなかった一因であったと考えられる。